

きずな部会での論点に関する委員の意見・提案

[※灰色のセルが今回追加分]

●双葉町民のコミュニティの維持について

1. 双葉町民が全国に避難している中で、町民のコミュニティを維持していくためには、どのような取組が求められるか。

【コミュニティ維持の総論に関する意見】	委員会/部会
○避難生活の中でも双葉町のアイデンティティを残し、ばらばらになっても町民が繋がり続けるためには、双葉町の絆を確保するためのコミュニティ論と、新しいところでのコミュニティ論の二つの戦略をつくらなければならない、どちらかを選択するというものではない。【再掲】	第2回委員会
○避難生活が長くなり、トラブルばかりが起き、双葉町の和が崩れコミュニティがほとんどなくなっている。	第3回委員会
○顔を見ながら、手を握ったり、肩を触ったりして話をするができる環境が、コミュニティの基本中の基本である。	第1回きずな部会
○それぞれが置かれている環境は千差万別なので、一つ一つできることから絆を確認していくことが重要。	〃
○行政に頼らず、自主的に地域コミュニティを形成する姿勢が大切。	第3回きずな部会
○検討の前提となる情報として、まずは全国に避難している双葉町のコミュニティの状況について把握する必要がある。	〃
○コミュニティを確立するには、これを運営する人たちに何らかの形で報酬を出すことが必要かもしれない。	〃
○コミュニティにとって重要なのは、つながりを継続することと行政の一定の支援。	〃
○ただ暮らすだけでなく、安心・安全に暮らすためには、地域コミュニティの存在が重要になってくる。	〃
○家族の絆、地域の絆、双葉郡の絆、そして福島県の絆があって、国の絆がある。このような絆があって初めて人は幸せを分かち合えるのではないか。	〃
○行政との協働、目標を共有しながら共に力を合わせていくことが重要。	〃
○若い世代との絆をどのように維持するかが問題。	〃
○コミュニティにはいろいろあるが、自治会が基本的な形。	〃
○福島県内のようなまとまっている地域と、全国各地その他の地域とでは、コミュニティの役割や形成の仕方も変わってくる。	〃
○地域のコミュニティの役割としては、セイフティネットとエンパワメントが大事。	〃
○1カ所にみんなで住むことにすれば、コミュニティの問題は解決する。	〃
○帰還に向けた議論をすることが、町民の心をつなぎとめるという意味で重要。	第3回ふるさと再建部会
○月に1回、高齢者の生活の様子を見に行ってもらえる行政サービスはできないか。【再掲】	第1回きずな部会
○生活支援員や社会福祉協議会のボランティアが月1回程度各家庭を訪問して、生活に関する不安を聞いてもらったり、行政に対する要望を聞いてもらったりしてはどうか。【再掲】	第3回きずな部会
○双葉町町民全体の「コミュニティネットワーク」の構築を第1に考える。また、双葉町持続再生の広報ネットワークの構築を重視し、検討する(双葉郡ネットワーク+全国広報+国際広報)。	第2回委員書面意見

○コミュニティ対策;居住地区コミュニティ+町外コミュニティシステム(高齢伝承コミュニティ+子供教育コミュニティ+壮年ビジネスコミュニティ、復興・伝承コミュニティ+支援コミュニティ)	〃
○子どもが帰って来なければ、先がないという事を含めた形で、将来がある子どもたちに対してどのような対策をしていくかということを考えれば、自ずと双葉町は必ず良くなり、絆が繋がっていくと思う。	第7回委員会
○今まで被災されてどういうプロセスがあったかが大事である。プロセスを積み重ねていくことが、コミュニティの役割である。	第4回きずな部会
【町からの情報提供に関する意見】	委員会/部会
○情報が町からは出ていないので噂が先行している。	第3回委員会
○毎月の町からのお知らせで、行政区の集まり、総会等の開催の情報をしっかりと知らせたい。	第1回きずな部会
○アンケート等で「情報が足りない。もっとほしい」という意見が多いが、このような不安を解消させるためにも絆づくりは重要。	〃
○物的施設としてのコミュニティセンターがある地域とない地域をリスト化してはどうか。	第3回きずな部会
【町民の連絡網に関する意見】	委員会/部会
○避難先における町民コミュニティの催事の告知をするにも連絡先がわからないため、各避難先ごとの連絡網をつくるべき。	第1回きずな部会
○今までも電話帳というものが存在していたわけであるから、個人の同意があれば、新たな電話帳も作れるはず。	〃
○居場所がわかるような連絡網を作成する必要がある。	〃
○元気であるかどうかだけでも確認したいのが避難者の心情であるから、今現在誰がどこに避難しているかがわかる新たな電話帳は必要。	〃
○7000人の復興会議でも電話帳に関する要望があった。	〃
○婦人会が中心となって行っているつくば生活学級では、連絡先を把握していないので、告知や連絡は役場を通してやっている。	〃
○手紙を出すにも居所がわからなくて困る。浅くて広い情報で構わないので、電話帳は作るべき。	第3回きずな部会
○新電話帳の利用価値の問題について考えていたら時間がかかりすぎると思う。また、取り残しが必ず出てしまうという問題が出てくると思う。	第7回委員会
○新電話帳を作ることは賛成である。しかし、個人情報になるので、載せる、載せないは個人で判断をさせるべきである。	第7回委員会
○新電話帳を作ってどれだけのメリットがあるのか。	第4回きずな部会
【町民の交流等コミュニティづくりに関する意見】	委員会/部会
○高齢者は双葉町の人々が集うイベントをとっても楽しみにしているので、町主導で、もっといろんなところでイベントを企画してほしい。	第1回きずな部会
○いわき市など、避難民が多く居住する集まりやすいような場所で集会を開くことが効果的ではないか。	〃
○つくばでは、他の被災自治体から集まったお母さんたちが集まったコミュニティがあり、芋煮会を行うなどの活動をしている。	〃
○双葉町婦人会は、女性に限らず、老若男女が集える場としている。	〃
○双葉町婦人会では、お年寄りの避難者におかゆや味噌汁を作ったりしてボランティア活動を行っている。	〃
○町民盆踊りのように、町が場所を手配・提供することはできないか。	〃

○双葉町の人が帰ってきたり立ち寄ったときに泊まれるようにするため、帰還可能になった双葉町や避難中の避難先に宿泊施設をつくってはどうか。	〃
○町や行政区ごとにダルマ市や神楽祈禱などを催してはどうか。その際、町民や区民に限なく連絡が行くようにすべき。また、遠方から来る人のために、町から交通費や宿泊費の助成があるとよい。	〃
○なるべく多くの方々に参加してもらうために、「あの人とは行きたくない」というようなこともなくしていきたい。	〃
○仮設住宅以外に居住する人について、新たな隣組などの新しいコミュニティの形成・参画を促すべきではないか。	〃
○同郷の人に会いたいという要望が多いので、催し物をやると遠方からも人が集まり、交流が図れる。	第3回きずな部会
○加須市の「こらっせ くわっせ 双葉」のような避難者が集まれる場所の確保が重要。	〃
○柏崎市には、震災の経験があるためか、双葉町民だけでなく福島県からの避難者同士がコミュニケーションを図れる場所がある。	〃
○きずな事業で、年1回盆踊りなど、双葉町のみんなが集まって交流を図れるような場を企画してほしいという声がある。	〃
○仮設住宅に入っている人は比較的コミュニティができていますが、借上住宅に入っている人はこういった地域活動の場に乏しい。	〃
○ある仮設住宅の集会所で、借上住宅の人が行ったとき「あなたは仮設じゃないから来てもらっては困る」と言われた事例がある。同じ町民なのだから、このような区別はするべきではない。	〃
○自治会等のコミュニティがあってもそこに参加できない人がいる。孤独死するおそれもある。そういう人たちをどうするかが問題。	〃
○福島県内や加須などまとまって避難しているところはよいが、問題は、全国に散らばっている人たちにとってのコミュニティをどうするか。	〃
○お墓を双葉町に残せば、お盆や正月などに集まれる場所として、町民のつながりを維持できるのではないか。	第3回ふるさと再建部会
○全国に避難している町民の孤立化を防ぐためにも、町民がある程度の規模で居住する拠点には、町民同士が集まっておしゃべりしたり、情報を共有できる心の拠り所となるような場所が必要。【再掲】	第3回生活再建部会
○集まれる場所がないというのが一番寂しい。人の付き合いは会わないと疎遠になってしまい、引き裂かれていくと思うので、短い期間で見なければならぬと思う。	第7回委員会
○住民コミュニティの話がまだ弱い。プライバシーの問題を脱却してもいいと思う。子どもが最大の被害者で柱が抜けている。	第4回きずな部会
【コミュニティの基点としての学校に関する意見】	委員会/部会
○子どもたちをどうつなげるかが重要であり、コミュニティの中心には学校を据えてはどうか。	第1回きずな部会
○子どもは適応能力が高いので、学校については早く対応しないと避難先の学校が母校になってしまうのではないか。	〃
○子どもたちにとっては、双葉町の学校を再開するということが大事。	〃
○子どもを基点とするコミュニティの維持として、廃校になった学校に双葉町の学校をつくるのはどうか。	〃
○次の世代、子どもたちの絆づくりを考えると、廃校を利用して学校をつくるのは一理ある。	〃
○双葉町の学校を再開する際は、児童生徒が集まるような特色を出す必要がある。	〃
○特に成長の早い子どもの心の問題を考えると、絆をつくる手段は早急にまとめた方がいい。【再掲】	〃

●双葉町の歴史・伝統・文化の継承について

1. 双葉町の歴史・伝統文化(無形文化財)をどのように記録し、未来に伝承していくか。	
【歴史・伝統文化の総論に関する意見】	委員会/部会
○地域コミュニティが崩壊しつつある中で、双葉町の歴史史料、伝統文化を守り継承することは、それらを町民全員で共有することによって心の拠り所となり、それが結集すれば町の核、生活の基盤になっていくと思う。【再掲】	第5回委員会
○双葉町の伝統文化を残していこうという活動が、双葉町のアイデンティティ形成やモチベーション向上のための一つの核になるのではないかと。	第2回きずな部会
○コミュニティがバラバラになると個人の精神状態も不安定になりがちである。個人のアイデンティティや人格を確立させる過程において、自分が育まれた地域の歴史や文化を知るといことは重要。	〃
○災害があつて初めて気づく双葉町の伝統・文化の良さもある。	〃
○これを契機に新しい伝統文化が見つかることもありうる。それは、正確には、古くからあつてこれまで見えなかったものであるが。	〃
○文化財は、町民の共有財産であり、双葉町の双葉町たる所以、双葉町のアイデンティティを形成する重要なものであることを認識すべき。	〃
○各行政区に関わる歴史は、コミュニティやそこでの生活があつたからこそ伝承されていたものであり、住民がバラバラになることで語り継がれることがなくなってしまうことに留意すべき。	〃
○双葉町の長い歴史の中で生まれて育まれた文化財が、長期間帰還できないことによって失われていくという危機感はしっかりと持つべき。	〃
○指定文化財になっていなくても、地区ごとに伝承された民俗行事なども重要。	〃
○双葉町の伝統文化をなくさない町民みんなが思うことが重要。	〃
○子どもたちの環境がどのようなものだったのかという中で、次の世代に引き継いでいくものは何かということを考えていかなければならないと思う。	第7回委員会
○優れた景観の場所に双葉町が出来た。この大きな財産をどう考えていくかで、伝統文化等が変わってくる。方針を決めた上で、生活の仕方が多様でない、今のままでは難しい。空間価値を発掘し、次の世代に繋げるのが基本だと考える。	第4回きずな部会
【歴史・伝統文化の維持方法に関する意見】	委員会/部会
○双葉町が育んできた文化財なのであるから、積極的に公開・活用することにより、双葉町民が親しめるような形で保存していくべき。	第2回きずな部会
○高齢者しか知らない無形文化財としての記憶を、若い世代に伝承する必要がある。	〃
○各地区の住民がバラバラになっており誰かがまとめるのは困難。町が芸能関係の年次計画などを立てるなどして推進していくべき。	〃
○伝承方法として、行政が助成金を出して、年に1度1ヵ所に集まってコミュニティの集合を図ってはどうか。	〃
○双葉町の風景・生活などの有形・無形の生活文化財を写真等デジタル化して集めることで将来の町民に引き継いでどうか。	〃
○伝統文化のような無形文化財は、これを担うコミュニティが分散してしまうと保存が難しいため、早急な対応が必要。	〃
○特に津波被災地域では、物理的な文化財がなくなってしまったため、記憶の文字化や伝承といった作業が重要となる。	〃
○国も県も、住民が残してほしいと要望する対象が決まらなると経費の支援もできない。まずは、双葉町民が保存・伝承すべき文化財を選定することが必要ではないか。	〃
○伝統民族文化は、住民の生活のリズムの中に存在するものであるから、まずは再度コミュニティを形成することが必要。	〃

○地域の伝承や歴史資料を残すため、①地名・伝承の聞き取り、②震災体験の聞き取り、③個人・無指定の文化財の救済の3点を急務として行っていくべき。それによって町民全体で共有することのできる「心の拠り所」になるのではないか。	第1回委員書面意見
2. 双葉町の伝統文化を継承していく町民を将来にわたってどのように育成していくか。	
【伝統文化継承の人材育成に関する意見】	委員会/部会
○継承していく町民を育成していかないと、双葉町の伝統文化は本当に残らないのではないか。	第2回きずな部会
○各地区の住民がばらばらになっており誰かがまとめるのは困難。町が芸能関係の年次計画などを立てるなどして推進していくべき。【再掲】	〃
○相馬流山踊りを若い人に教えたり、ふたば音頭をみんなで踊る機会を設けたり、伝統行事の継承のために、できるところから少しでも実践していくことが重要。	〃
○高齢者しか知らない無形文化財としての記憶を、若い世代に伝承する必要がある。【再掲】	〃
○仮の町ができれば自ずと伝承の機会ができる。今は分散しているので難しいのではないか。	〃
○学校が再開すれば、そこが双葉町の伝統文化を伝える場となる。	〃
○伝統文化を下の世代に伝承していくためには、学校が重要。	〃
○人材育成で一番重要なのは、双葉町の伝統芸能の分野ではないか。	〃
○何らかの形で町が1カ所に集まれば、伝統文化の継承の機会も設けやすくなる。その上で、遠方から来る町民については、行政が補助すべきではないか。	〃
○ここでいう学校とは、物理的・制度的な学校ではなく、双葉町伝統文化を若い世代に伝承するための仕組みとしての学校であることに留意すべき。	〃
○伝統芸能については、若い人が実際に習うところまでもっていかなければならない。	〃
○1カ所にみんなに住むということに決まれば、伝統文化の承継の問題は解決する。	第3回きずな部会
○地域の歴史は地域にあつてこそ意義があり、史料を守り歴史を語り継いでいく担い手の存在なくては次に繋がっていかない。	第1回委員書面意見
○子ども世代の再会は有意義である。子どもが参加してくれることが大事であり、会いたいという気持ちがある。その場に文化を継承するのが大事ではないか。	第4回きずな部会

3. 歴史民俗資料館、図書館、史跡など、双葉町に残された文化財産をどのように取り扱っていくべきか。	
【町に残された文化財産の保存・管理方法に関する意見】	委員会/部会
○個人宅に文化財が置きっぱなしであることが考えられるが、そういったものを町として持出し、保存等を行っていくことが必要ではないか。その場合、事前にどのようなものが対象になるのか住民に説明・確認する必要がある。	第2回きずな部会

○文化財は経年すると傷んだりするのであるから、文化財の保存という議論をするに当たっては、これらの移転先となる仮の町ができることが前提となるのではないか。	〃
○帰還する時期によって保存等の方法が変わってくることに留意すべき。	〃
○例えば図書館や歴史文学資料館などをきちんと除染して、そこに大事な文化財を集めるのはどうか。	〃
○個人収蔵文化財については、個々の住民が持ち出す文化財の対象、方法等について専門家の意見を聞く必要があるのではないか。	〃
○文化財の中には震災の影響で壊れているものもあることから、どのようなものが持ち出すべきものかということを議論するとともに、まずは文化財の現状把握が重要。	〃
○個人収蔵文化財の持出しについては、町がとりまとめて綴りを作成する必要がある。	〃
○県資料館等には一時保管されているのであり、最終保管場所ではないことを忘れてはならない。	〃
○町民の中で文化財に精通した人を募って、調査や助言を行うチームを組んではどうか。	〃
○持ち出せるものは、持ち出して人目に触れる場所に置いておくことが重要。持ち出せないものは映像で保存・公開しておくべき。これは子どもへの伝承という観点からも必要。	〃
○歴史学や民俗学の専門家の協力を得るべき。	〃

●新たなコミュニティの形成について

1. 避難の長期化が見込まれる中で、双葉町民のコミュニティの維持だけでなく、避難先の住民との交流も必要ではないか。

【避難先での住民との交流に関する意見】	委員会/部会
○避難生活の中でも双葉町のアイデンティティを残し、ばらばらになっても町民が繋がりを続けるためには、双葉町の絆を確保するためのコミュニティ論と、新しいところでのコミュニティ論の二つの戦略をつくらなければならない、どちらかを選択するというものではない。【再掲】	第2回委員会
○双葉町の住民同士のコミュニティだけでなく、避難先の住民と融和したコミュニティをつくる必要がある。	〃
○コミュニティについては、今までのコミュニティの維持のほか、地域に根差した維持という観点が重要。	第3回委員会
○避難先で自分ができることを探しながら、地元と交流していくことが大事。	〃
○料理や踊りの教室など、学習や教室を通じて地域の地域と交流を図ることが重要ではないか。	〃
○つくばでは、地域の大学の先生や商工会の方々に進学相談にのってもらったりしている。	〃
○つくばでは、筑波大学の先生にお声掛けいただいて、婦人会が、地元の転倒防止の体操の会に参加している。	〃
○つくばの小中学校のPTAのお母さんによると、つくばは若い世代が多いため、お年寄りと交流する機会を求めているという。	〃
○つくばでは、100本のツリーを飾る地元のクリスマス・パーティに参加した。今年も参加する予定。	〃
○自治会等が避難先の地域催事などを紹介する定期的な広報を行ってはどうか。	〃
○まずは避難先の地域にどのようなコミュニティがあるか状況把握することが重要ではないか。	〃
○行政に頼らず、自主的に地域に根差していくことを意識しなければならない。	〃
○避難地域の行政区の方々とお城の散歩、自治会の集まり等に参加し、交流している。	第4回きずな部会

2. 避難先の住民との交流を進めていくに当たっては、相手先の土地・住民を知るというだけでなく、双葉町を理解してもらおうといった視点も必要ではないか。そのためには、具体的にどのような取組が必要か。

【避難先での双葉町の理解促進に関する意見】	委員会/部会
○他の被災自治体から避難したお母さんたちで集まったコミュニティをつくり、芋煮会などを行っている。	第1回きずな部会
○双葉町婦人会では避難先のコミュニティで相馬流山踊りを披露している。これまで、加須市のお祭りを皮切りに、つくばや福島県内などで何十回も行っている。	第3回きずな部会
○相馬流山踊りを披露したところ、つくばのPTAのお母さんたちが「ぜひ子どもにも見せてほしい」とおっしゃったので、つくば並木のお祭りで踊った。	〃